



順風発進

県政だより

Vol.5 発行：早田順一

熊本県議会議員
早田 順一 事務所
 山鹿市宗方通105グリーンパーク内
 [E-mail] hayata.j@sky.plala.or.jp
 TEL 0968-42-8088 FAX 0968-42-8018
 ▼早田順一 ホームページ
 www.j-hayata.com

東日本大震災

平成23年
6月5日～7日

宮城県 被災地へ



六月五日から七日にかけて宮城県の被災地へ大西県議と行ってきました。宮城県議会議員かん県議の呼びかけで、是非現地を見てほしいという事で、南三陸町・石巻・女川を視る事が出来ました。また、途中で避難所(約四

六〇人)に立ち寄りしました。その避難所は合併前に出来た総合施設(約八〇〇〇㎡)で、合併してからはおそらく建設されていなかったのではないかと勝手に想像しましたが、大きな複合施設だったお陰で被災後、暗闇の中で自家発電で明かりがともるこの施設に当初七〇〇人以上の方が、寒い中水浸しになりながら逃げてこられたそうです。現在は支援物資も十分足りていて、トイレ、洗濯機、お風呂もテントの中ではありますが完備されているようです。しかし、長引く避難所生活で、いざこざがあるのも現状で避難所内で自治組織を立ち上げ決まり事をみんなで決めていくそうです。他の避難所では、また上水道の復旧が進まず、ウジ虫やハエ等が大量に発生して衛生面の心配をされる場所もありました。また、地元の方の話を聞くと避難所では酒とタバコが重宝されているとの事で災害から約一〇〇日経過すると相当のストレスが溜まらされているのではないかと感じました。帰る家もなく、仕事もなく、仮設住宅に入ると自立しなければいけない、雇用面も含めて対策が必要と思いました。



実は、私の親戚もまだ一家で避難所生活をしていたり、宮城県の祖母は入所中の老人施設で度重なる地震と停電のため体調が悪くなり4月初旬に亡くなりました。友人も当初避難生活して今はどうにか自立していますが、ビールを飲んだり、美味しい刺身を食ったりしていた生活はまったくできず、避難所生活をしていない人でも生活がぎりぎりでの日の生活に困っている人も沢山いる事を、私も含めてみなさん知っておかなければならないと思いました。

被害現場では、車窓から見る光景は、テレビで見る状況以上で走れども走れども被害現場が続き唾然としました。水の破壊力がこれほどまでに凄いかと思われ知らされました。今はまだ復興ではなく復旧の段階でありますが、今後どのような展望でまちづくりを考えて整備されていくのか相当難題だと思います。若者も仕事がなく、東京に仕事を求めて離れて行くそうです、ホテルを避難所に提供して頂いている女将さんがこの町はどうなるのだろうか不安げに話されました。

報道で知る姿と現場でしか感じられない姿と状況を知ることが出来ました。これからの支援も日々変わっていくと思うので、被災地の人々の気持ちを忘れることなく考え行動しなければならぬと思います。



岩手県被災地 ボランティア活動

平成23年
7月11日～14日



城北高等学校の生徒会・先生・保護者、合わせて七名で岩手県宮古市へボランティア活動に行ってきました。先生が被災地の現状を子ども達に話したら現場でボランティア活動がしたいという事になり、PTAにも相談があり「子ども達が行きたい」と話が始まりました。三泊四日の日程で活動してきました。

被災地では、未だげれきの山や解体中の現場もあり事前に日本アスベスト調査診断協会本山幹事長に、安全対策の話を聞いていたことが大変なためになりました。作業現場のすぐ側で家や店舗の解体作業をしており、風向きを意識しながら作業をすることができました。もちろん専用のマスクを着けての作業です。

今回一緒に参加していた方の中には、北海道から来て三週間目の人、大学の学生グループ、OLと様々な方がボランティアに来られていました。中でも自分の父親が津波に呑みこまれ行方不明になっておられるのにボランティア活動をされていた女性がおられ、生徒にこの現状をしっかりと伝えて今後に活かしてほしいと話されました。

三日目は、先生のご友人の方に被災地を案内してもらいました。中でも宮古市田老は日本一の防波堤を築いていた町でした。明治二十九年、昭和八年など幾多の大津波により壊滅的な被害を受け、多くの尊い



当時の状況話をくださった宮古市田老地区のお寺の和尚さん

命と財産を失った地域です。「津波防災の町」を宣言され、津波のシミュレーションや避難訓練など万全な対策をとっていたのに数百人の方が犠牲に遭われました。当時の状況を高台にあったお寺の和尚さんに話して頂きました。家がなぎ倒され、すぐ側まで押し寄せた状況を取り返さず話されました。また、前町役場の災害対策課長さんの話と合わせて聞くことが出来ました。



風化する歴史を語り継ぐため、田畑ヨシさん(八十五歳)が昭和五十四年に、津波の恐ろしさを孫たちに伝えようと、自身の体験をもとにした紙芝居「つなみ」が作られ、これまで読まれてきたことなど安全対策や危機意識があったはずなのにどうして逃げ遅れたのかと和尚さんも嘆いておられました。今後この地域の復興はどのようになるのか分かりませんが、田中ヨシさんが「命は自分で守るんだ」と父が残してくれた言葉が実際に体験したこと、その言葉の重みに気付いたといわれています。人が築き上げた物など自然の力には及ばないことを実際に現場を見て気付かされました。今回、子ども達と一緒に貴重な体験をすることが出来たと思います。この体験を今後のボランティア活動の輪を広げることや熊本県でどんな災害が起こるか分かりませんが、この体験が少しでも役に立つことができればと思います。